



操淨瑠璃に於ける「謎・判じ物」(中)

近 石 泰 秋

一、種 類

文字謎・ことばの謎判じ物

稀に淨瑠璃の中にも文字謎が用ひられてゐる。近松の「嵯峨天皇甘露雨」の大序には彼の小野篁が解したと傳へられてゐる「無惡善」(さがなくばよし)の謎を空海が解く様に趣向してゐる。又「赤澤山伊東傳記」の大序では「一八一二八八二八一三」と云ふのを、各文字の中央を——を以て貫き「平末水本生」の文字とし、是を「平は末にして水本(源)生ず」と讀み、平家調伏の謎であると解する。實に複雑な謎である。然し「享保世話」の卷一には、神社の守護札に此の種の判じ物が用ひられてゐた事が記録せられてゐる。單純なものでは「三浦大助紅梅約」二段目切に、「あのお軒は此礎を逆様にしたのじやはいの。とは如何じや。ハテキヌタを逆様によめば狸寝入空軒」の如き全く他愛ないものである。

ことばの謎・判じ物と云ふのは、多く會話の中に用ひられて、互にその意を通じ合ふものである。普通のもの、世に行はれる謎の本等に見えるものと同じ形式である。「後三年奥州軍記」(享保十三年、宗輔)四段目切に、

加茂の次郎は好色に、移る心もおはせねど、東屋宮城野兩人が、名を改めて此の程より、取り持つ戀は我が爲と悟り給ひてほれく、と、やさしの東女中やな。捕はれとなる我が身をば、誰が慕うて一筆の、文玉章を送るべき。上り船とも柳とも、心次第よさりながら、今宵は少し心頼み、奥の一間で經讀誦、ふもんほんばに忘れじと、經にかこつけ其座をば、いぢむぢいふて立ち給ふ。信夫は後を見送るて、是々二人の衆、今のお詞に上り船とも柳とも、心任せとは何のこと、解いて聞かしやとありければ、東屋ひとつりそんなこと解かうが爲の御奉公、上り船との御上意は、引手にするとのお心、ナウ萩どの、それく柳と有るは戀風になびくとの御仰。すりや戀は叶うたか。

とある謎かけは「十二段草子」の「やまとことば」の段の系統を引くもの、説經「しんとく丸」二段目、古淨瑠璃「頼朝三嶋詣」の三段目等にもあり、海音の「本朝五翠殿」一段目切に百姓を集めて、照日の前を捜す條に、

一つ年の頃は立待月、顔匂やかに満たけて、丹花の唇桂の眉、露を含める花の姿、風に隨ふ柳のとりなり、情の露の滴りて指折る數も七つ程、覺は先にもあるべしとの勅詔なりと宣へば、百姓共は顔見合せ、何とどうやら耳寄りな目出度相なることなれば、玉様からの判じ物、此方とが智恵では解け難い。露を含める鼻柱は天狗に似たとの事である。

と云ふ滑稽なものもあり、「近江源氏先陣館」盛綱陣屋の段の篝火と早瀬の矢文に書いた和歌も此の種の謎と考へられよう「丹生山田青海鯨」（元文三年、宗輔）二段目切に山田の爺が娘空蟬を尋ねて不愛相に扱はれ、

どうやら天狗風の吹いた跡へ來た様で、付穗がないとつぶやいて一間の内へ行く
と云ふのは、所謂二重謎である。

然し以上は、淨瑠璃に用ひられて居りながら、少しも淨瑠璃的特色を持つてゐないものであつて、他の物語や小説等にあるのと何等變るところがない。所が次にあげる様な例は、同じくことはの謎、判じ物ではあるが、大いに趣を異にする。

「ひらがな盛衰記」（元文五年、文耕堂、松洛、千前軒等）二段目切源太勘富の場で、母延壽は宇治川先陣の失敗を責めて、我が子梶原源太を勘當し阿呆拂ひとする。腰元千鳥は悲んで源太の爲に許しを乞ふと延壽はもう勘當した以上直接源

太には話しかける事が出来ないの、弟平次景高に云ふ體にして、その實は兄源太に言ひ聞かすのである。

コリヤ能く聞け。源太めがあのさまは、第一の見せしめ。あの恥を無念と思はゞ、西國へ攻め下つて平家を滅し、手柄して我君の御用に立たば、ナ勘當はせぬ。ナ平次、ナ心得たか、必ず手柄を待つてゐる。母が詞を忘るゝなと弟が事に言ひなして、兄を勵ます詞の謎々。とくより母の御慈悲とは、知る程重き源太が額、土に摺付け泣き居たる。

「ナ勘當せぬ」以下の三回の「ナ」は意味深重であつて、弟平次に云ふと見せて實は兄源太に言ひきかせてゐるのである事を悟らせようとする技巧的な表現である。作者は是を「詞の謎々」と稱してゐるのであるが、詞そのものは決して所謂謎ではない。然し平次に言ふ詞を以て、兄源太に表面の勘當した態度とは反對の心底の溫い慈悲を感じさせようと云ふのであるから、その詞が二重の任務と意味とを持つてゐる。この點に於て、少くとも「謎的な性格」を十分に備へてゐる譯である。そこで作者は此の如き場合常に「詞の謎」と稱してゐるのである。そして是は「心底」の表現に關聯し、舞台技巧から云へば、所謂「謎詞」なのであつて、そこに世に行はれる謎とは異つて操淨瑠璃的な性格が存在してゐるのである。此の如き詞の謎の例、

尼御台由比濱出

(享保十四年 出雲・千四作)

四段目中

壇浦兜軍記

(享保十七年 文耕堂・千四作)

三段目切

車邊合戦櫻

(享保十八年 文耕堂作)

一段目切

甲賀三郎窟物語

(享保二十年 出雲・文耕堂作)

三段目

安倍宗任松浦笠登

(元文二年 宗輔作)

二段目口・切

崇徳院讀岐傳記

(寶曆六年 出雲・千四・松洛作)

二段目口

役行者大峰櫻

(寛延四年 外記・半二・文四作)

四段目・切

伊賀越道中双六

(天明三年 半二・加作作)

兩崎の段

等、尙此の他にも多い事である。

事物の謎・判じ物

事物の謎・判じ物とは、意中を事物に托して相手に之を悟らしめようとするものであつて、世に云ふ「判じ物」であるはつとばかりに板額は、夫が懸けておこしたる忍びの絲の判じ物、解けて胸をば苦しめり。(和田合戦女舞鶴三段目切)の如き用ひ方である。先に挙げた「七小町」の小袖を贈つて、「さなきだに重きが上の小夜衣わがつまならぬつまな重ねそ」の心を表すが如きである。「甲賀三郎宿物語」四段目口筑摩祭の段は有名な近江の筑摩神社の祭を趣向に取入れた興味ある段である。敵役望月兵庫頭は兼ねて横領しようとしてゐる甲賀家の後室久堅御前を筑摩祭の見物に案内し、その場へ鍋二枚を箱に入れて進物とする。それは嫁入した度數だけの鍋を頭に戴いて神事を勤める女達に象つて、二度の縁付を決心して我が意に従へとの謎である。久堅御前は是を悟つて

何を隠さう、望月様此の久堅に執心とて、今迄千束の玉章も、我が身が氣を引き見ん爲と心ですまし置きつるが、此進物を見るからは、云ふに及ばぬ二度の縁、神に誓ひし御心に従へとの難題、誠や歌にも「近江なる筑摩の祭とくせななつれなき人の鍋の數みん」と口ずさみしも身の上に思ひ廻せば情なや。

と云つて歎き悲しむのである。尙此の外、刀や弓の矢を離縁の印に與へるとか、草本に意中を示すとか、本心を現はした献上物を奉るとか云つた様な判じ物の趣向は非常に多い。此の類の「事物の謎」の例を少し挙げる。

愛護若塙箱

(正徳四年 海音作)

二段目口

傾城無間鐘

(享保八年 海音作)

二段目口

大塔宮囃鎧

(享保八年 出雲・和吉作)

三段目口

關八州繫馬

(享保九年 近松作)

二段目切

身替弓張月

(享保十年 一風・千柳作)

一段目切

攝津國長柄人柱

七小町

加賀國篠原合戰

尼御台由比演出

須磨都源平躰圖

應神天皇八白旗

刈萱桑門筑紫轡

甲賀三郎窟物語

和田合戰女舞鶴

猿丸太夫鹿卷毫

鷗山姫捨松

伊豆院宜源氏鑑

道成寺現在蛇鱗

入鹿大臣皇都諄

傾城枕軍談

葛蒲前操弦

崇徳院讃岐傳記

平惟茂凱陣紅葉

奥州安達原

(享保十二年 宗助・蛙文作)

三段目切

(享保十二年 出雲作)

三段目口

(享保十三年 出雲・千四作)

一段目切

(享保十四年 出雲・千四作)

三段目口

(享保十五年 文耕堂・千四作)

二段目口

(享保十九年 文耕堂作)

二段目切

(享保二十年 宗助・丈助作)

一段目切・二段目切

(享保二十年 出雲・文耕堂作)

四段目口

(元文元年 宗輔作)

三段目切

(元文元年 文耕堂・松洛作)

三段目口

(元文五年 宗輔作)

四段目切

(寛保元年 文耕堂作)

四段目切

(寛保二年 一鳥・宗輔作)

三段目切

(寛保三年 出雲作)

三段目口・切

(延享四年 千柳・松洛・出雲作)

三段目切

(寶曆四年 出雲・半二・松洛作)

三段目口・切

(寶曆六年 出雲・半二・松洛作)

四段目切

(寶曆六年 出雲・半二・松洛等)

一段目切

(寶曆十二年 和泉・後一・半二・三郎兵衛作) 三段目切

次に「義經千本櫻」(延享四年、出雲・松洛・千柳)の三段目切すしやの段に於いて、頼朝の命により、梶原平三景時は高野の方に落ち延びた維盛・若葉の内侍・六代御前等を捕へようと詮議してゐる。すしや彌左衛門の子いがみの權太は梶原の爲めに働いて、内侍と六代御前を縛つて手渡した。(その實は自分の女房小せんとその子を身代りにしてゐるのである)梶原はその褒美のしるしとして權太に頼朝の陣羽織を與へて歸る。後で彌左衛門は怒つて權太を殺す。手負になつて權太は女房と子供とを身代りにした苦衷を物語り、兼ねて助けておいた維盛・内侍・六代を請じ入れる。維盛は權太の忠義を賞し、その死を悲しみつゝも、頼朝への怨み深しとて、晋の豫讓の例にならつて、せめて頼朝の陣羽織を切つて、恨みを晴さうとする。然るにその裏に「内や床しき、内ぞ床しき」と二つ並べて書いてある。そこで小町の「雲の上は有し昔にかはらねど見し玉簾の内や床しき」の和歌を思ひ起し、此の羽織の縫目の内ぞ床しきと切りほどく。中には袈裟衣、珠數が入れてある。維盛は其の心を解いて、

保元平治の其の昔、我父小松重盛、池の禪尼と言ひ合せ、死罪に極まる頼朝を、命助けて伊東へ流人、其の恩報じに維盛を助けて出家させよとの鸚鵡返しか恩がへしか。ハア、敵ながらも頼朝は敵の大將、見し玉だれの内よりも、心の内の床しや。

と悦ぶのである。

此の場合の謎は、同じく事物に托された謎ではあるが、「内や床しき、内ぞ床しき」の意味する所を解き宛てゝ、然る後目的の事物に到達し、それを又解くのであるから、謎が二重になつて居り、前のよりは複雑である。是と全く同じ様な趣向が「諸葛孔明鼎軍談」(享保九年、出雲)の三段目切にある。「すしや」の段は此の系統を引いてゐるのである。尙此の類の「事物の二重謎」の更に工夫を凝らした面白い例が二三見受けられる。

井筒業平河内通

(享保五年 近松)

三段目口

伊勢平氏年々鑑

(享保十一年 出雲)

二段目口

後三年奥州軍記

(享保十四年 宗助、蛙文)

三段目切

應神天皇八白旗

(享保十九年 文耕堂)

四段目切

蝶花形名歌嶋臺

(寛政六年 笛舳・魚眼)

八冊目

次に同じく「義經千本櫻」の大序を見るに、源義經は平家を西國に滅し、後白河法皇の院の御所に參上し、戰の有様を奏上する、左大臣藤原朝方は法皇より賜はる初音の鼓を義經に渡して、鼓の裏を義經、表を頼朝に准へて、其の鼓を打て則ち頼朝を追討せよとの院宣であると傳へる。義經は

ハア、其の鼓が院宣ならば、頼朝・義經打和らぎ睦しく禁庭の守護致せとの勅候やと言ふ。朝方は尙も

頼朝は法皇へ敵對ふ所存、兄頼朝を打てとある追討の院宣

と主張する。朝方は實は「理を非に枉げて兄弟中同士討させて仕廻はん工み」なのである。則ち法皇より下さるゝ鼓を、「事物の謎」とし、その解き方が義經と朝方と異つてゐる譯である。然して此の解釋の相違が則ち立役方、敵役方の對立抗爭の萌芽を示してゐるのであつて、やがては此の作に盛り込まれた全事件を根本的に左右してゆくのである。「入鹿大臣皇都評」の大序には

やよ聞け、朕此の曉不思議なる夢を見る。劍の池の中に莖一つにして花二つある蓮の一つは赤く、一つは白く、二股に咲きたるを夢みしが、心ならず思ひし故、圖書の頭して書かせたりと女官を以て召し寄せ給ひ、和漢の道に賢き中將此の心いかならむ、判じて見よと勅詔有る

是に對して、山背の中將爲人卿は、「二股に咲きたるは、天下に二人の君子有つて、天下を評ふ前表の御夢」と解する。敵役蘇我入鹿は「今度の夢想の蓮の二股、兄弟を蓮枝といふ。大兄の君は天皇の弟、花の一方赤き色は、謀叛を顯はす夢の告」と判する。此の判じ方の相違が、此の作中の諸事件を生起せしめてゆくのである。

(以下次號)